

「門松は 冥土の旅の 一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」

この歌は、とんちの一休さんで有名な室町時代の禅僧、一休宗純いっきゅうそうじゆんの作と伝えられています。その文言などについてはさまざまな説があるようですが、お正月に街の中を、骸骨がいこつを付けた杖をつきながら「ご用心、ご用心」と歩き廻ったという逸話と共に、禅僧としての一休さんを象徴する歌として今に伝わっています。

自分の年齢がお正月に一つ増えるという数え年の習慣が当たり前だった時代、お正月は年が改まる喜ばしい時であると同時に、年齢が一つ増えて、骸骨に象徴される「死」に一步近づくという現実を、めでたくはないけれども、しっかり見つめることを忘れてはならないと人々に伝えたかったのでしょう。

今年のお正月は令和最初のお正月です。昨年五月、元号が平成から令和へと変わり、改元の前から令和ブームが盛んに報道されました。祝賀御列おんれつの儀にはお二人を一目見ようと大勢の人々が集まり、令和ブームを象徴しているかのようでした。

まさに日本中がお祝いムード一色です。

しかしながら冷静に日本社会を見ると、今年も異常気象による自然災害がおこり、経済格差も広がる一方です。また不明瞭な政治行政の問題も指摘されます。

さまざまな問題に目がくらみそうな現代社会ですが、もちろん喜ばしいこともたくさん起こ

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

ります。一休さんは、喜ばしいことには「めでたくもあり」と喜び、だからといって本当に見つめるべき大切な、自らの「いのち」についての問題を忘れないように、浮かれてばかりもいられない「めでたくもなし」という捉え方も必要なのだと、私たちに示していると受け止めることもできるでしょう。

一休さんが街を歩きながら語った「ご用心、ご用心」の言葉は、今の私たちに向けられている言葉でもあるのです。

— 終 —